

未来

郵政産業ユニオン
PIWU
全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中郵支部
機関紙 「みらい」
NO. 4172
21年8月6日(金)
Tel・Fax 095-828-1953

コルベ神父や小崎 登明さんに学ぶ！

おはようございます。

長崎ピースサイクルの難所の日見峠を越え、トンネルを抜ければ長崎の町が見えてくる。長い下り道の山手に見えるのが聖母の騎士修道院だ。

「この修道士だった小崎登明さんがこの四月に九三歳で亡くなられた。今年の長崎原爆祈念日の集会で市長が読み上げる宣言文に「二度と戦争をしてはならない」という小崎さんの言葉が入れられたと聞く。合掌。」



この聖母の騎士修道院を作ったのはコルベ神父だ。一九三〇(昭和五)年に来日し、六年間、長崎で布教に努め、故国のポーランドへ帰っている。しかし当時の欧州はナチス台頭の時期で、ユダヤ人絶滅の弾圧で、彼もアウシュビッツ収容所へ拘束される。



彼の著書「長崎オラシヨの旅」に書いている。(オラシヨとはポルトガル語で祈りの意味だ。)

彼、ガヨヴィニチェクは、この身代わりするとき、コルベ神父に「ありがとう」のお礼の言葉が言えなかつたことを心残りだと言っている。彼は世界各地で「戦争は二度とあつてはならない。強制収容所は二度と作つてはならない。世界に平和を叫び続けましょう」と、訴え続けたという。彼の腕には、アウシュビッツの番号のいれずみがいっぺいたとも書いている。

四日に殺される。今から八十年前の悲しい出来事である。合掌。

このとき、コルベ神父を身代わりとした男性(ガヨヴィニチェク)は、一九九五(平成七)年まで生存し、九三歳で亡くなっている。小崎さんはこの男性と二度も面会をし、彼のその後の生涯を、彼の著書

愛の行為だったといえよう。



私たちの長崎市民は、長崎の聖母の騎士修道院を作ったコルベ神父の身代わり受刑死のことを、南山手にあるコルベ神父記念館などもあり、歴史

このときの収容所の係員は、驚きのあまり「私は...地獄に落ちるだろうね...」と自問する。

この収容所での囚人たちは、「こじや、愛などでは生きていけないのだ。愛よりもなによりも、生き残ることが重大なのだ」としたが、コルベ神父は、「愛がない世界ならば、愛をつくらねば...」と語る。彼が身代わりの刑で殺されることを受け入れることこそ、

的な出来事として知っているが、彼の愛の行為には理解がおよばない。

しかし、同じ戦争の結果としてのナチスのユダヤ人の大虐殺と、原爆による大量死をともに体験した人であり、



この不条理な死をくりかえさせてはならない。

小崎登明さん(当時十七歳)は被爆当日、八月九日のことを次のように語る。「登明は母親との二人家族だったが、被爆当日の朝、彼は『行つてきます』と母に声をかけた。食器洗いをしていた母は笑ってくれた。それが最後だった。母は家もろとも即死したが、彼はトンネル工事のために助かった」という。

小崎さんは戦争と原爆の語り部として、「長崎は戦争の被害を受け、原爆を受けた町です。私も戦争の体験者、被爆者です。長崎は一発の核爆弾によって、七万数千人の市民が一瞬のうちに亡くなり、多くの人が傷つきました。もう二度と戦争を起してはならない」長崎は平和を叫び続

ける町です」と語り続けた。「オラシヨの旅(小崎登明)から」。

今日、六日は広島原爆忌。三日後は長崎原爆投下日だ。七六回目の祈念日だが、被爆者や被爆二世も亡くなる時間が経過した。

しかし、世界には十九国、二万発の原爆がある。被爆都市長崎の役割は、被爆体験を世界に発信し続ける責務があり、市民も平和のためにたたく義務もある。長崎市民はその主人公として、自覚と行動が求められている。

コルベ神父や小崎登明修道士のように、愛の心を持ち続けた。愛のない人類を殺す核の世界がいまであるならば、



核兵器廃絶で愛のある世界へつくりかえよう。原爆祈念日とコルベ神父の命日である八月十四日は、その一里塚である。想いも新たに、祈念日を迎えよう。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員、希望者全員、正社員化を。

めいせ、均等待遇、なぐさう差別！ ユニオンは労基法裁判に勝利するぞ！

期間雇用パート労働者の皆さん！ 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1集-海江田, 2集-向井, 3集-山田, 支部・分会の役員へ。